

Title	まえがき
Author(s)	飛鳥井, 雅道
Citation	人文學報 = The Zinbun Gakuh : Journal of Humanities (1995), 75: [1]
Issue Date	1995-03
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/48438">https://doi.org/10.14989/48438</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## まえがき

「文学からなにが見えてくるか」という、あまり人文科学研究所らしくない名前をつけた班をわたしたちが出発させたのは、1989年だった。これまで「文学理論の研究」班が、桑原武夫教授によって1960年代に組織され、報告書も出版されており、また、最近は大浦康介さんによって「記号・意味・文学」という班もあったが、わたしたちとして、やや、こうした研究法とはニュアンスを変えたい気分があったのは否定できない。理論、理屈は、意識的にできるだけ禁欲して、文学からはみでてしまうもの、文学とはよべないかもしれないもの、明らかに文学ではなくても感動をよびうるもの、これらをまず、感覚として正確に読み取ることができる会を作ってゆきたかったのである。

もちろん、これは理論を排除することを意味しない。結果としてのこの報告書に、各人が依拠する理論的よりどころが、人によってはかなりはっきり示されていることで、了解していただけのだろう。ただわたしたちは、それ以前に、読むこと自体をまず大切にしたいと願ったのである。

しかし、願いは願いとして、こうした試みは当然ながら、わざと回りくどい道を採用することにつながり、研究会の運営は行きつ戻りつした。加えて、班長のわたしが、病気をくりかえしたため、班員各位に迷惑をかけ、運営をさらに困難にした。班員諸氏にお詫びするとともに、研究期間の延長を2度にわたって許してくれた研究所の諸氏に、本報告書の提出によって、お詫びと感謝の一端を表わしたい。

この報告書の論文の対象は、洋の東西を問わず、また、中世から近代にまでわたっている。またジャンルとしても、いわゆる書かれた文学のみに限られていない。しかし、この多様性のなかになにものかを探ることこそが、わたしたちの目指したものであった。したがって、この報告書では、各執筆者が選んだ対象によって、あえて機械的に、時代順、地域順に論文を配列した。

日本中世の能から始まり、インドネシアの物語にいたる多様な対象のなかにわたしたちの試みたものが、それぞれの読みとりかたとともに、提出されているはずである。

わたしたちは、この研究会の過程で、言葉について、また言葉の伝わり方、翻訳のされかたについて、改めて注意を喚起させられることになった。研究会としては初めは数回のテーマだったはずのロビンソン・クルーソーの最初の日本語訳、黒田麴廬『漂荒紀事』の検討会が、やがて黒田麴廬の原書であったオランダ語版との対比検討へと発展し、時間的に可能な数名の班員は、ついに、めいめいが蘭学者(?)となって、研究会のなかに『漂荒紀事』部会を発足させ

ることになった。この部会の報告書は、別の単行書の形で出版される予定であるが、ここでは19世紀中葉のヨーロッパと日本の、言葉、文化、生活様式の諸相が、広く、かつ精密に共同研究として検討されるであろう。

「文学からなにが見えてくるか」班は、班としては1994年3月で終了したが、その後も多くの班員は斎藤希史を班長とする研究班において、19世紀を中心に検討を続けている。文学の発見は、数年後にまた新たな局面を示すかもしれない。今回の報告書には、残念なことに論文をいただけなかった方がいる。この方々から、また、無償でゲスト・スピーカーとしていろいろ教示して下さった方々から、わたしたちは多くを学んだ。心からお礼を申し上げたい。

1994年12月

まえがき追記

印刷が予定より遅れている間に、たいへん残念なまえがきの追記を書かねばならなくなった。

研究班参加者で、この報告書にも原稿を寄せて下さった東南アジア研究センターの土屋健治氏が、1995年2月27日に、亡くなった。本報告書の論文が、氏の遺稿になってしまったのである。氏の報告は、いつも、鋭い分析とともに、暖かいユーモアに満ちたものであって、氏の報告の日は、研究会全体が楽しい雰囲気にも包まれたものだった。体調を崩された中での力作を寄せて下さった氏に、いままさらながら感謝するとともに、冥福をお祈りし、学恩をわたしたちの仕事の中に生かしてゆくことを誓いたい。有難うございました。

1995年3月

飛鳥井 雅 道